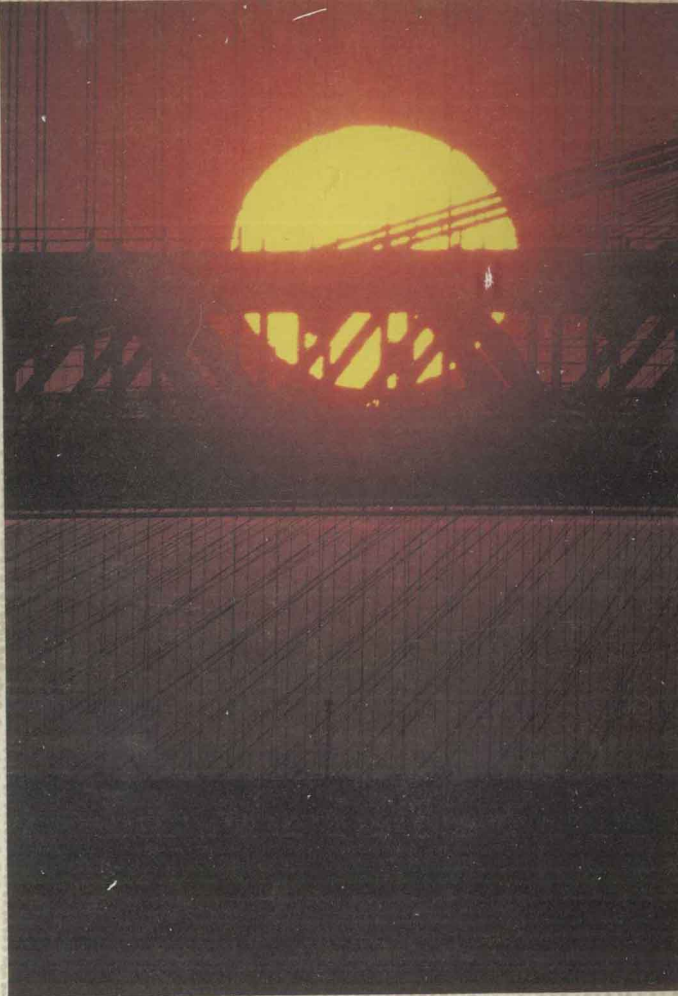


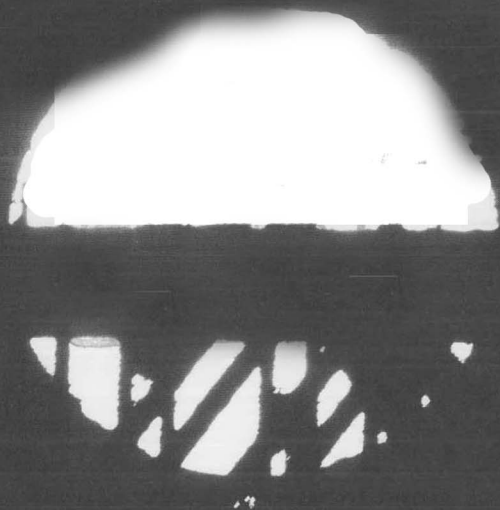
死を描く影絵

えが

森村誠一



光文社



えが
死を描く影絵

森村誠一

光文社

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―一三

(〒112-11)

光文社 文芸編集部

死を描く^{えが}影絵

一九九一年 五月三〇日 初版一刷発行

著者 森^{もり}村^{むら}誠^{まこと}一^{いち}

発行者 大坪昌夫

発行所 株式会社 光文社

東京都文京区音羽二―二―一三

電話 東京〇三―三九四二―二三四一(代)

振替 東京六一―一五三四七

印刷所 公和図書

製本所 榎本製本

定価一、三〇〇円
(本体一、二六二円)

死を描く影絵^{えが}

森村 誠
一

目次

犯人のいない人生 5

帰路 33

恋^{れん}刑^{けい} 49

夜の声 79

余命^{よめい}の正義 125

音 169

街角の切り花 205

装幀／安彦勝博
写真／後藤善臣

犯人のいない人生

1

「あら、大変」

例年、わが家に贈り届けられてくる中元の整理をしていた妻の美和が、突然、声をあげた。

「なにが大変なんだい」

朝食後、ぼんやりと新聞に目を走らせていた有坂信は、妻の美和の方へ目を転じた。

「先日、デパートへ中元の発送依頼に行ったとき、依頼書のコピーによその家の発送依頼書がま
ちがって入ってきちゃったのよ」

「すると、どういうことになるんだい」

有坂はすぐには妻の話題に入っていけない。

「発送依頼書がこちらへきてしまったのだから、宛て主のところへ品物が届かないわね」

「それじゃ依頼人が確認をしなければ、お中元が不達だったことを、依頼人も受取人もデパート
も気がつかないということになるのかな」

「たぶんそういうことになるでしょうね」

「しかし、依頼人はもう金を払ってあるのだろう」

「発送依頼書が書かれたということは、すでにお金を支払われたということよ」

「それじゃ、金を受け取っていながら中元を送らないデパートは、詐欺じゃないか」

「デパートのミスであることは確かだね」

「さっそくデパートに連絡してやりたまえ」

「面倒だけど、そうしてやるわ。べつに連絡してやる義務はないけれど」

美和は、発送依頼書をもって電話機の方へ行った。

有坂家では毎年、中元、歳暮の季節になると、たいした数ではないが、新宿の「赤看板デパート」にそれぞれのお届け先別に選んだ品物の発送を依頼している。

有坂は以前、東京の中どころの電機会社勤めていたが、ある文芸誌の新人賞に入選したのをきっかけにして脱サラをし、文筆業に転向した。そのときは天下を取ったような気がしたものだ、いっこうに芽が出ないまま、不流行作家としての数年が経過した。

受賞した文芸誌が年に二、三回、お情けでかけてくれるお座敷だけが発表舞台のような売れない作家の悲哀を、いやというほど味わわせられた。

年に二、三回のお座敷ではとうてい生活していけないので、妻が働きに出た。いわば妻にぶらさがっているひも作家である。いまに有坂文学をもって天下を席巻してやるという気概でスタートしたが、売れない原稿で自分が席巻されたようなあんばいになった。

それでも有坂はやめなかった。サラリーマン時代とちがって、小説には自分の署名を入れられる。社会に署名付きの仕事などはそうざらにあるものではない。その作品がまったく無視されよ

うと、自分でなければ書けない作品であることは確かである。

サラリーマンのように会社を休もうと辞めようと、即座に代替がきくという仕事ではない。そこに有坂は生きている手応えを感じた。たとえその手応えが年二、三度のお座敷であっても、有坂は後半生において自分が選り取ったこの仕事が好きであった。

有坂の地味ではあるが人生と社会を凝視する作風が、次第に一部の編集者や読者に注目されるようになって、この一、二年のあいだに執筆依頼が増えてきた。

軽薄短小時代には適^むかない作風であるが、このシラケ世相の中にも人生の凝視にこだわりつづける彼の作品を評価してくれる読者がいたのである。

有坂の作品が次第に読者から要求されるようになったことは、例年の中元、歳暮に忠実に反映した。出版社や編集者からの中元、歳暮の量が格段に増えてきたのである。

彼と同期に受賞して、一躍流行作家となった女流作家は、殺到する中元、歳暮を収納するため十畳ほどの部屋をつぶしているという噂^{うわさ}があった。それには遠く及ばないにしても、妻がその整理にうれしい悲鳴をあげる程度には、贈り物の質量が向上してきたのである。

有坂は中元、歳暮の時期になると、その数量が自分の作家としての位置を反映しているようである。うれしかった。

出版社から贈られてくる品物は、例年、おおむね定まっている。有坂家に贈られてくる品物は、酒、果物、菓子、茶、海苔、油、佃煮、乳製品、ハムなどであるが、夏は清涼飲料水や素^{そうめん}麺、冬は産地直送の生鮮食品が増えた。

中元の性質も仕事の上の関係が圧倒的に多い。これにつづくのが個人的な友人や身内のあいだ

で交わす慣習的な贈答である。定期的な贈答もあれば、一回かぎりの贈答もある。稀にはあるが、何の理由でもらったのかわからないような品物もある。

虚礼だの儀礼的だのといわれながらも、中元、歳暮をもらって怒る人はいない。こちらが贈っていないのに相手から早々ともらって、当惑することはある。また、明らかにこちらから贈ったものよりも、はるかに高価な品物を返されて恐縮することもある。

中元、歳暮の贈答品には、日ごろの交際関係から、この人にはこの程度の品という「予算」がある。その予算を超えた品物をもらったときに当惑や恐縮をするのである。

だがこの予算の立て方が非常に難しい。こちらが立てた以上の予算を相手が立てていた場合には、贈答品が逆効果になる場合もある。その典型的な例が浅野内匠頭と吉良上野介であろう。

幸いにして有坂家には予算から極端にはずれた品物はこなかった。おそらくこちらからも贈っていないであろう。

妻がデパートに電話をして、戻ってきた。

有坂は不安になってきた。先方から贈り物を受け取っているのに、こちらからの届け物がデパートのミスによって不達になっていったとしたら、大変な失礼をしたことになる。

出版社にはいちいちお返しをする必要はないが、担当編集者には日ごろの感謝を込めて、もらったものの少なくとも二倍以上の品は返さなければならぬ。発送依頼書がどこかに紛れ込んでしまえば、依頼人は当然発送されたものとおもひ込み、デパートも発送したものと信じているだろう。

しかし依頼主は届け先からなんの挨拶もないのに、こちらから確かめるわけにもいかず、不満

を胸にたくわえる。また届け先の受取人は、受け取ってもいない品物の礼はできない。その人が中元、歳暮の先手をとっていれば、こちらからなんの反応もないのに、なんと失礼なやつとおもっているかもしれない。

べつに中元、歳暮をもらいたいわけではなく、そこに人間関係が集約されているのである。

「うちのお中元は大丈夫だろうな」

「私も心配になってきたので問い合わせしてみたの。デパートは平身低頭して、こんなミスは滅多に発生しないのだと、しきりに言い訳していたわ」

「どこの人だい」

「知らない人よ」

有坂は興味をもって、わが家の発送依頼書コピーに紛れ込んだ他家の発送依頼書を見た。

贈り主は有坂と同じ市域に住む秋吉隆あきよし たかしという人物である。受取人は都下町田市の石野英也いしの ひでやである。品物は海苔となっている。

「贈り主の秋吉さんという人はわりあいわが家から近いな」

有坂は依頼主の住所を注目した。有坂は神奈川県愛名市あいなの郊外にある団地に住んでいる。クジにあたって移住してきたのであるが、もう二十年近く住みついてしまった。初代住人二千所帯は、今はその一割しか残っていない。

「これも何かの縁だね」

妻が言った。わざわざ新宿のデパートまで行って依頼した中元発送依頼書に、同じ市域に住む人の依頼書が紛れ込む確率は低いだろう。

有坂はふとした機縁で、自分の生活圏の中にまったく無縁の人たちの人間関係が紛れ込んだのがおもしろかった。

中元を贈答するからには、この秋吉と石野のあいだには何らかの人間関係があるはずである。仕事の上の関係か、個人的なつながりか、あるいは一度かぎりの儀礼的な贈答か、有坂は未知の人たちの人間関係をあれこれ臆測した。もともとそのような野次馬根性は旺盛である。だからこそ作家に転業したのである。

秋吉が石野に贈った海苔という品物は無難である。酒や菓子やコーヒーなどの嗜好品、また道具類や衣類、アクセサリーなどの趣味の品はある程度相手の人間や生活環境を知らないと、贈るのに憚^{はば}られる。その点、海苔やお茶は儀礼的な贈答や、まだ知り合っていない人に贈る品として適する。

秋吉が石野に贈った品物から察して、彼らの人間関係はまだあまり深くないような気がした。定期的に贈答する間柄であれば、いつも同じ品に限定してしまうこともあるので、いちがいに商品から人間関係の程度を推測することはできない。

わが家の依頼書にこの人の依頼書が紛れ込んだということは、デパートの中元カウンターで隣り合って書いていたからだろう。

「きみはこの秋吉さんという人をおぼえていないのか」

有坂は妻に問うた。彼の野次馬根性が次第に強まってきている。

「お隣りにだれがいたか、いちいちおぼえていないわよ。ちょうど中元のシーズンでカウンターはとても混んでいたもの」

「まあ、いいことをしたよ。べつに知らせてやる義理もないが、これで秋吉さんの海苔も救われたというわけだ」

数日後、デパートから係員が菓子折を持参して謝りに来た。

2

その後、何事も起きなければ、この中元発送依頼書混入事件は忘れられてしまうはずであった。それから二カ月ほどして、有坂は朝食後、いつものように新聞を丹念に読んでいた。べつに小説のヒントを得るためではない。仕事部屋にはいるのが億劫で、新聞を読むのを口実にしているだけである。特に今日は新たな短編の発想の日である。

なにもないところから作品世界を生み出すのはつらい。ある程度作品がすべりだせば加速度がつくが、起こしの日はつらい。冬の朝の冷えきったエンジンのようになかなかスタートしない。こんな日は仕事部屋に入るのがひどく億劫である。

新聞に漫然と目を走らせながら、仕事をはじめめる時間を一寸延ばしに延ばしていた有坂は、「おや」

とつぶやいて、目を社会面の一隅に固定した。そこに記憶のある名前を見つけたのである。

「秋吉隆、神奈川県愛名市。これはまちがえられた中元発送依頼書の依頼主じゃないか」

有坂はつぶやいた。

九月十五日午前十時三十分ごろ、神奈川県相模市北方蟹沢きたかたかにさわの雑木林の中に男性の死体がある

と、付近を通りかかったハイカーから一〇番通報があった。神奈川県警相模署員が現場に臨場して調べたところ、持っていた名刺から、同県愛名市旭ヶ丘あさひ三十×の会社員秋吉隆さん（三二）と判明した。秋吉さんの後頭部には鈍器で殴られたような痕があり、現場は道路から七、八メートル下の雑木林の谷底になっているところから、秋吉さんはべつの場所で殺されて、死体を棄てられた可能性が強いと見られる。同署では神奈川県警捜査一課の応援を求め、殺人、死体遺棄事件の捜査本部を設けて、捜査をはじめた。

捜査本部の調べによると、秋吉さんは十四日午後七時ごろ、いったん会社から帰宅して、再び家を出たまま帰らなかったという。秋吉さんの着衣は乱れておらず、財布がそのまま放置されていることから、顔見知りの者の犯行の線で捜査を進めている。――

「秋吉隆が殺された」

有坂は新聞から目をあげて、宙をにらんだ。秋吉とはなんの関係もない。中元発送依頼書が過あやまってわが家へ紛れ込んできただけである。ただそれだけの、縁とはいえないような縁であったが、有坂の胸に奇妙にひっかった。

季節になれば中元を贈り、贈られる。しごく平穩無事な人間関係の中にあった秋吉が、突然、凶暴な犯罪の犠牲者となった。いったい彼はどんな理由で、だれに殺されたのか。袖触れ合うも多生の縁というが、秋吉とは中元が触れ合った仲といえぬこともない。

好奇心が有坂の胸の中に徐々にふくれあがってきていた。